平成１７年度　一橋大学法科大学院入学者選抜試験

小論文試験問題

・解答上の注意

1．問題文は７枚、解答用紙は１枚（表・裏）、下書き用紙は１枚です。
2．解答用紙には、一橋大学の受験番号を記入し、氏名は記入しないでください。
3．解答は横書きにしてください。
4．解答用紙は、受験番号を記入する面が表になります。問１を表に、問２を裏に解答してください。
5．解答用紙の追加、交換はしません。
6．解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使わないでください。
7．問題の内容についての質問には、応じません。
8．試験終了後、問題文と下書き用紙は、持ち帰ってください。

平成１７年度　一橋大学法科大学院入学試験問題

（平成 16 年 11 月 28 日実施）

小　論　文

問１：　以下の文章を読んだ上で、なおカーソンとローマ・クラブの議論を擁護しようとすれば、どのような議論ができるか。

問２：　「われわれの社会はもう十分豊かなのだから、これ以上の経済成長を求めるべきでない」という考え方について、この文章の著者の立場からどんなことが言えるか。

（回答用紙は１枚。各問１０００字以内。句読点と算用数字は１字として扱う。）

環境問題について世界で最も大きな衝撃を与えた本は何かと問われたら、大方の人は『沈黙の春』と『成長の限界』を挙げるだろう。この二つの本は、今の状態が続けば地球の危機と人類の破滅も間近だ、という暗いイメージを人々に植え付けた。この終末論的なイメージを前提にして、環境倫理学は展開されている。その意味では、環境倫理学の原点と呼んでいいだろう。それぞれ問題は違っているが、それが引き起こした効果という点では似通っている。

『沈黙の春』は、海洋学者で作家のレイチェル・カーソンが 1962 年に発表した本だ。最初は雑誌『ニューヨーカー』に連載され、大きな反響を呼んで単行本として出版された。当時アメリカでは、有機塩素系農薬や殺虫剤が大量に使われていて、自然環境を汚染し始めていた。環境保護団体である「全米オーデュボン協会」は第２次大戦後に農薬公害のキャンペーンを張っていたが、カーソンはそれと連携して農薬調査を行ない、『沈黙の春』を出版したのだ。『沈黙の春』が出版されたとき、化学産業界はカーソンを「ヒステリー女」などと罵りながら批判と非難を繰り返した。しかし、結局こうした反論は消え去り、政府機関を動かして危険な農薬は禁止されるようになった。こうして、『沈黙の春』は「アメリカを変えた本」と呼ばれるほど、社会に大きな影響を与えたのだ。

もう一つの『成長の限界』は、「人類の危機についてのローマ・クラブ報告」という副題が付いているように、先進諸国の「経済界とその知的ブレーン」から構成された「ローマ・クラブ」がＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）チームに研究依頼し、それに対する報告書になっている。ＭＩＴのメドウズらは当時最先端の大型コンピューターを駆使して、未来社会のシミュレーションを描き出した。1972 年にニューヨークで出版されると同時に、その衝撃的な内容に世界は騒然とした。地球の破滅というシナリオが、科学的に論証されたように思われたのだ。あるフランスの農学者は当時次のように言った。「もし現在のような人口と工業生産の級数的な増加がつづけば、次世紀にはわれわれの文明は不可避的に全面的に崩壊する。いま平均寿命は 75 歳だから、1975 年に生まれたフランス人の多くがその崩壊を目のあたりにみることになる。」

それぞれの本が出版されてから、すでに三、四十年ほどたっている現在、地球の破滅というシナリオはどうなっているのだろうか。確かに、シナリオの中身は少しずつ変化している。しかし、「地球の破滅」という枠組みは今でもしっかり保持されている。終末論はまだ健在なのだ。しかし、こうした終末論に問題はないのだろうか。もう一度原点に立ち返って、考え直してみることにしよう。

★『沈黙の春』の恐怖

『沈黙の春』の積極的な意義については、すでに多くの人が語っている。それについて、改めて言及する必要はないだろう。ここで問題にしたいのは、『沈黙の春』の根本的なモティーフであり、その倫理学的な検討だ。その検討を行なえば、もしかしたら環境汚染について別の視点が可能になるかもしれない。

『沈黙の春』の根本的なモティーフを確認しておこう。「明日のための寓話」と題された最初の部分を見ると、カーソンの意図がよく分かる。

アメリカの奥深く分け入ったところに、ある町があった。生命あるものはみな、自然と一つだった。（……）

春が来ると、緑の野原のかなたに、白い花の霞がたなびき、秋になれば、カシやカエデやカバが燃えるような紅葉のあやを織りなし、松の緑に映えて目に痛い。丘の森からキツネの吠え声がきこえ、シカが野原のもやの中を見え隠れつ音もなく駆け抜けた。（……）たくさんの鳥がやってきた。いろんな鳥が数え切れないほど来るので有名だった。（……）山から流れる川は冷たく澄んで、ところどころに淵をつくり、マスが卵を産んだ。（……）ところが、ある時どういう呪いを受けたのか、暗い影があたりにしのびよった。今まで見たことも、聞いたこともないことが起こりだした。若鶏はわけの分からぬ病気にかかり、牛も羊も病気になって死んだ。どこへ行っても、死の影。（……）そのうち、突然死ぬ人も出てきた。何が原因か分からない。（……）自然は沈黙した。うす気味悪い。鳥たちはどこへ行ってしまったのか。（……）春が来たが、沈黙の春だった。（……）いつもだったら、いろいろな鳥の鳴き声がひびきわたる。だが、いまはもの音一つしない。野原、森、沼地―――みな黙りこくっている。

ここで描かれているのは、現実の町ではなく「寓話」だ。「そんなのは空想の物語さ、とみんな言うかもしれない。だが、これらの禍がいつ現実となって、私たちに襲いかかるか―――思い知らされる日が来るだろう。」現実ではないが、現実がそこへと向かっている世界の終局、それをカーソンは描いている。それは、春が来ても自然が沈黙している「病める世界」だ。これに類した町や村が、アメリカではたくさん生じつつあった。それに対する警告を込めて、カーソンは『沈黙の春』を書いた。

これに対して、カーソンは何が原因だと考えているのだろうか。直接的な原因と、その背後にある根本的な原因を理解する必要がある。カーソンの場合、この二つがしばしば混同され、必ずしも明確に区別されていない。そのため、『沈黙の春』の主張が非常に曖昧になってしまうのだ。

直接的な原因というのは、言うまでもなく有機塩素系の農薬や殺虫剤だ。これが沈黙の春を生み出した。ＤＤＴやＢＨＣなどの化学薬品を過剰に使用し、それによって害虫だけでなく、鳥や他の動物も死にたえ、川や土壌などの汚染が進行した。ところが、カーソンの憤慨はこれにとどまらない。彼女はさらに、「人間による自然支配」を告発するのだ。この本の中心的な一つの章で次のように語っている。

> 自然を征服するのだ、としゃにむに進んできた私たち人間、進んできたあとを振り返って見れば、見るも無惨な破壊のあとばかり。自分たちが住んでいるこの大地を壊しているだけではない。私たちの仲間―――いっしょに暮らしている他の生命にも、破壊の鉾先を向けてきた。過去二、三百年の歴史は、暗黒の数章そのもの。合衆国西部の高原では野牛の殺戮、鳥を撃って市場に売り出す商売人が河口や海岸に住む鳥を根絶に近いまで大虐殺し、オオシラサギをとりまくって羽をはぎ取った、など。そしていままた、新しいやり口を考え出しては、大破壊、大虐殺の新しい章を歴史に書き加えてゆく。あたり一面殺虫剤をばらまいて鳥を殺す、ホ乳類を殺す、魚を殺す。そして野生の生命という生命を殺している。私たち現代の世界観では、スプレー・ガンを手にした人間は絶対なのだ。邪魔することは許されない。昆虫駆除大運動のまきぞえをくうものは、コマドリ、キジ、アライグマ、猫、家畜でも差別なく、雨あられと殺虫剤の毒は降り注ぐ。誰も反対すことはまかりならぬ。

ちょっと長いが、カーソンの立場がよく出ている文章なので、注意して読んでほしい。環境汚染を引き起こしたのは、一方で化学薬品の過剰な使用だが、他方では人間による自然支配でもある。何百年にもわたる人間の自然支配に基づいて、今回新たに化学薬品によって自然を破壊し尽くす、というわけだ。しかし、化学薬品による環境汚染を、人間による自然支配と単純に結びつけることができるのだろうか。それはむしろ、問題を紛糾させるだけではないだろうか。

★牧歌的な自然崇拝と人間中心主義

カーソンの『沈黙の春』は、一方で牧歌的で自然崇拝的な本だ。引用したこの本の冒頭部分に、牧歌的自然と「沈黙の春」の対比がよくでている。カーソンは生態学的知識に基づいて、「自然」が「完全な均衡（バランス）」・「多様性の維持」を保つ、と考えている。彼女は「自然の美しさ、自然の秩序ある世界」に感動し、この自然と調和して生きることを願っている。それに対して、人間は「狭いエゴイズムの立場」から自然を踏みにじり、自然のバランスを破壊してしまう。自然界の生命体を人間という野蛮人が殺戮・殲滅する、というイメージだ。

牧歌的な自然崇拝という特徴は、カーソンがシュバイツァーを尊敬する点にはっきりと現われている。『沈黙の春』はシュバイツァーに捧げられ、「未来を見る目を失い、現実に先んずるすべを忘れた人間。そのゆきつく先は、自然の破壊だ」という彼の言葉を引用している。人間もまた自然界の一員であるのに、恐るべき力を手に入れて、

自然を破壊していく。つまり、「人間中心主義」によって、自然の生命が破壊されてしまう、といったところだろうか。

だから、大切なのは、人間による自然支配をできるだけ排除し、自然界の過程に委ねることだ。自然界の害虫を駆除するためには、人間による化学薬品の使用ではなく、自然界に備わっている生態系を利用する方が効果的だし、望ましいだろう。

> 化学薬品を撒布するよりも、自然の寄生虫を利用した方がトウノヒノムシ防除に効果があることが、記録にも残っている。こうした自然そのものに備わっている防除力こそ、十分に活用されなければならない。
> 人間ではなくて、自然そのものの行なうコントロールこそ、害虫防除に本当に効果がある。

このように見てくると、カーソンの議論は「生命の神聖」を唱え、「鳥が鳴かない沈黙の春」を憂え、どちらかといえば「生命中心主義」を主張しているように見えるだろう。しかし、かなり曖昧にしているとはいえ、実際にはカーソンが人間中心主義に立つことは疑えない。それはなぜだろうか。

『沈黙の春』のポイントは、人間による環境汚染が結局は人間自身に返ってくる、という点だ。人間が作り出したものによって、人間が復讐されてしまうという構図が基本だ。

> 環境汚染から発生する病気と殺虫剤の関係は？　土壌、水、食糧の汚染については、今まで書いてきた。川からは魚が姿を消し、森や庭先では鳥の鳴き声もきかれない。だが、人間は？　人間は自然界の動物と違う、といくら言い張ってみても、人間も自然の一部にすぎない。私たちの世界は、すみずみまで汚染している。人間だけが安全地帯へ逃げこめるだろうか。

化学薬品によって、人間の体がガンや神経系統の疾患におかされてしまう。さらに、人間の遺伝子までも、化学薬品によって歪められてしまうのだ。自然界への汚染は、結局は人間自身への汚染につながる。環境汚染は人間の破滅への道なのだ。化学薬品の使用は、人間にとって有害であるからこそ、禁止されなければならないわけだ。

この人間中心主義という点は、カーソンが「害虫」について語っていることでも明らかだ。たとえ生態系を利用して害虫を駆除するとしても、「害虫」が「害虫」であるのはあくまでも人間にとってだ。人間の立場を除外して「害虫」という概念は成り立たない。人間の利益に反する「害虫」であるからこそ、生態系を利用して駆除するのだ。人間の利益を守る、ということに関してカーソンが反対しているわけではない。その「害虫」を駆除する化学薬品による方法が、人間にとって効果的でないばかりか、さらに有害でもある、と批判しているだけだ。これは典型的な人間中心主義と考えていいだろう。

さらに、化学薬品の使用が逆に、害虫の抵抗力を増大させ、「自然の逆襲」を引き起こす、とカーソンは考えている。「自然は、人間が勝手に考えるほどたやすくは改造できない。昆虫は昆虫で人間の化学薬品による攻撃を出し抜く方法をあみ出しているのだ。」しかし、「自然の逆襲」が強調されるのは、人間の利益を守るためだ、という点に注意したい。人間が害虫を効果的に駆除するにはどうしたらいいか、という関心から「自然の逆襲」が語られるのだ。「人間」の立場に立つのでなければ、自然が「逆襲」することなどあり得ないはずだ。

このように考えると、『沈黙の春』には相異なる二つの立場が、明確に自覚されないで混在しているのが分かるだろう。しかし、生命中心主義と人間中心主義は、問題設定も解決法もそれぞれ違っている。『沈黙の春』はこの対立する立場を、曖昧なまま放置してしまっているように思われる。そのため、『沈黙の春』の主張には、しばしば混乱が生じてしまうのだ。

★ トレード・オフ問題

『沈黙の春』は環境汚染の実態を報告し、人間による自然破壊の悲惨さを告発する。では、いったいどうしたらいいのだろうか。化学薬品の全廃だろうか。『沈黙の春』の激しい主張からすれば、私たちはそれを期待していいかもしれない。

しかし、カーソンは必ずしも農薬や殺虫剤の全廃を意図しているわけではない。化学薬品の部分的な使用を認めるのだ。

> 殺虫剤の使用は厳禁だ、などと言うつもりはない。毒のある、生物学的に悪影響を及ぼす化学薬品を、だれそれかまわずやたらと使わせているのはよくない、と言いたいのだ。

たとえば、化学薬品をいっさい使わなければ、マラリア、ペスト、チフスなどの病気が発生し、食糧生産は激減するだろう。こんなことは、どう考えても現実的ではない。だから、問題は化学薬品を使うか使わないか、つまりオール・オア・ナッシングではなく、それをどう使うかだ。

これについて、『沈黙の春』は何か情報を与えているだろうか。残念ながら、『沈黙の春』は化学薬品による汚染を告発することに終始し、それをどう使うかに関しては何も語っていない。彼女の本は、化学薬品の全廃を意図していなくとも、結局そうした印象を与えてしまうのだ。

この問題は、もっと大きな問題を含んでいる。それは「トレード・オフ問題」と呼ばれるもので、関係する事柄の利益と損失を比較検討し、どの方針が最適かを決定するのだ。環境問題に限らず、この方法は現実的な問題を考えるとき必ず考慮しなければならない。たとえば、『沈黙の春』に関しては、次のようなトレード・オフ関係があるだろう。

（1） 生活の快適性と生命の危険性
（2） 化学薬品使用による農業の効率性と使用しない場合の非効率性
（3） 化学薬品による被害と、使わないことによる別の被害
（4） 経済的な利益と環境的な損失

これらは、全てを網羅しているわけではない。「化学薬品を使うことで得られる利益と損失」、また「化学薬品を使わないことで得られる利益と損失」、これらのものを比較検討して、最終的にどんな薬品を・どんな方法で・どの程度まで使うか決定すべきだろう。大切なことは「オール・オア・ナッシング」ではない、ということだ。

この点に関しては、パスモアの次の指摘に着目しておきたい。それを「汚染ゼロはあり得ない」と表現しておこう。

> 一般に汚染の追放を要求することは、おそらく手の届かない、自滅的でもあるような一つの理想をかかげることになるのである。なぜなら、社会的問題はどれをとってみても、完全に払拭されたためしはないからである。そしてこの事実を認めまいとする拒絶感が、しばしばそうした問題の発生と被害の減少をはかる完全に満足すべき方法から注意をそらせてしまうのである。ある点では、それは費用の問題に解消される。不愉快ではあっても、このことは容認されなければならない。

『沈黙の春』においてカーソンが示したのは、過剰な化学薬品の使用によって環境が汚染されることだ。この告発によって、確かにＤＤＴやＢＨＣなどの農薬は使用が禁止されるようになった。しかし、言うまでもなくあらゆる農薬や殺虫剤が禁止されるわけではない。いっさいの化学薬品の使用禁止は、「自滅的」に違いない。いったいどうやって、現在必要とされる食糧を賄っていくのだろうか。病気の発生をいかに抑えるのだろうか。生態系を利用する方法はどこまで有効なのだろうか。カーソンの議論からは、全く手がかりがつかめないのだ。

★ 『成長の限界』の衝撃

カーソンが『沈黙の春』によって「環境汚染の恐怖」を描いてから十年後、世界を震撼させる本が出版された。『成長の限界』と題された一つの「報告書」が、1972年に発表されたのだ。「2100年までに大惨事が訪れる――ある研究報告」とか、「科学者による地球破滅への警告」というような新聞の見出しが走った。ある意味で、いわゆる地球環境問題の基本的な枠組みは、この本によって作られたと言っていい。世界と人類の未来像を描き、地球の危機を警告する手法は、その後さまざまに行なわれているが、『成長の限界』こそは私たちが踏まえるべき原点だ。

この本は、「世界各国の科学者・経済学者・プランナー・教育者・経営者などから構成」されたローマ・クラブの依頼を受けて、ＭＩＴの研究グループがまとめた報告書だ。この報告書の内容に入る前に、ローマ・クラブそのものを理解しておくことが重要だ。ローマ・クラブの方針が、報告書の内容に大きな影響を与えているからだ。ローマ・クラブの方針を正当化するために、この研究報告書が作成されたと言ってもいいかもしれない。ローマ・クラブの日本会員の一人はこのクラブについて次のように説明している。

> 本クラブは最近にいたって急速に深刻な問題となりつつある天然資源の枯渇化、公害による環境汚染の進行、発展途上国における爆発的な人口の増加、軍事技術の進歩による大規模な破壊力の脅威などによる人類の危機の接近に対し、人類として可能な回避の道を真剣に探索することを目的としている。1968年4月、ローマで最初の会合を開催したことにちなみ、ローマ・クラブと名づけられている。

つまり、「このままの勢いで経済が成長し、資源が消費され、環境が汚染されていった場合に、はたして地球がいつまで人間の棲息を保証しうるだろうかという問題意識」から、誕生した団体だ。ＭＩＴに研究を依頼したのは、これを科学的な形で正当化するためだ。答えはすでに出ていた、と言ってもいい。では、この委嘱を受けて、ＭＩＴの研究者たちはどんな未来予測をしたのだろうか。彼らが提出した結論は次のものだ。

> 世界人口、工業化、汚染、食糧生産、および資源の使用の現在の成長率が不変のまま続くならば、来るべき百年以内に地球上の成長は限界点に到達するであろう。もっとも起こる見込みの強い結末は人口と工業力のかなり突然の、制御不可能な減少であろう。

この結論は、かなり控えめな表現で、本論の中ではもっと過激な予測が繰り広げられている。たとえば、食糧に関しては、現在の人口増加率が続けば、「楽観的仮定に立ったとしても、西暦2000年を待たずして絶望的な土地不足がやってくる」と予測する。また、天然資源に関して、「西暦2000年までに予想される70億の人類に満足な生活水準を約束するような経済成長を維持するに足る十分な資源は存在するだろうか」と疑問視する。個別的にいえば、石油が31年、天然ガスが38年、銅が36年、亜鉛が23年などと予測されている。こうした、予測が当たっているかどうかは、この予想をどう理解するかに左右される。土地不足や資源枯渇の傾向が間違いない、という点では確かに当たっているだろう。しかし、具体的な年数に関しては肯定しがたいだろう。「石油は毎年あと30年」などというジョークが語られるのも、このあたりに理由がある。

また、環境汚染については、炭酸ガス、熱エネルギー、放射性廃棄物、有機性廃棄物、有毒金属廃棄物などが問題になっている。その際注意したいのは次の留保だ。

> どのくらいの炭酸ガスや熱汚染を放出すると、地球の気候に不可逆的な変化を与えることになるのか、どの程度の放射能、鉛、水銀あるいは殺虫剤が植物や魚類、または人間によって吸収されると生命の営みが非常に阻害されることになるのか。これらの点は、判明していないのである。

この制約を認めつつ、結局環境汚染について次のように結論する。

> 汚染の発生は、人口、工業化並びに特定の技術進歩の複雑な関数であるから、放出される総汚染量の幾何級数的曲線が、どれほど急速に上昇するかを正確に推計することは困難である。もしも西暦2000年における人々が、今日のアメリカと同程度に高い１人あたりのＧＮＰをもつならば、環境にかかる総汚染負荷量は、少なくとも現在の十倍になると推定することができるであろう。地球の自然システムは、このような大規模な攪乱に耐えることができるであろうか。われわれは、なんら答えをもちあわせていない。（……）しかしながらわれわれは、限界が存在するということだけは認識している。その限界は、すでに多くの部分的な環境において突破されている。人口と各人の汚染活動の二つを幾何級数的に増加させていけば、確実に世界的な上限に到達してしまうであろう。

いくつかの長い引用を行なったが、ある程度ＭＩＴ報告の内容が理解できるだろう。一応百年と時間を限定しているが、繰り返し想定されているのは西暦2000年なのだ。そのとき、地球全体が破滅の危機に陥る、と予測するわけだ。このレポートが1972年に公開されたとき、世界が震撼したと言われるのも納得できるはずだ。

★「限りある地球」と「均衡社会」

『成長の限界』が描く未来予想は果たして当たったのだろうか。百年という期間で考えるかぎり、まだ結論を出すことはできない。確かに、2002年現在からすれば、個々の予想された数字は変更が必要だ。人口増加率は予想ほどではないし、天然資源の枯渇や食糧不足も予測とは違っている。現在でもまだ石油は30年ほどは大丈夫だと言われるし、予想されていた金属資源の枯渇もまだ起こっていない。

『成長の限界』には、当初からさまざまな批判があった。「方法論が粗雑」だとか、「技術進歩の可能性を過小評価している」だとか、いろいろ批判されていた。そして、30年たった現在、多くの予想が外れたのならば、『成長の限界』の意義はどこにあるのだろうか。見失ってならないのは、『成長の限界』の中心的な主張と、細部の個別的なデータを明確に区別することだ。細部のデータが若干違っていても、中心的な主張が正しければ、『成長の限界』の予想が外れたとは言えない。早晩予測された事態が生じるだろう。だから、問題はその中心的な主張なのだ。

『成長の限界』の中心的な主張は、基本的に二つだ。第一に、「地球の有限性」の自覚だ。「地球には限りがあるという事実」、これを世界に向けて発信することが大切なのだ。「人類は、地球が限界に近づいているということをまだ理解していないように思われる。」しかし、この無自覚がもっとも危険だ。「この地球上で物質的成長が無限に続く」という考え、つまり「盲目的な進歩」観は地球の破滅へとつながっている。手遅れにならないうちに、「地球の有限性」へと思考転換を図り、それに応じた行動を行なうことが必要になる。

「地球の有限性」に連動して、第二の主張として「均衡状態の世界」が積極的な価値として提唱される。ローマ・クラブの見解として次のように語られている。

> 考え方のコペルニクス的転回を必要とするほど、今までの経験からほど遠い現実であるけれども、経済的ならびに生態学的に均衡した安定状態にある社会という概念は、容易に把握することができるものと思われる。しかしながら、この概念を実現することは、非常な困難と複雑さに満ちた仕事である。

問題はこうだ。今までのように人口と経済の成長路線を歩んで近い将来に地球の破滅を迎えるか、それとも「地球の有限性」を自覚し、「均衡状態の社会」へと思考を転換して地球の危機を乗り切るか、このいずれの道を選択するかの岐路に立っている。

このように見ると、『成長の限界』の未来予測はまだまだ片づいていないのが分かる。「地球の有限性」を否定する人はほとんどいないだろう。とすれば、地球の破滅という終局にいたる前に、私たちは「均衡状態の社会」へと方向転換すべきだろうか。

★西洋中心主義

『成長の限界』は「地球の有限性」を説き、「均衡状態の社会」への転換を提唱する。人類の救世主のようだ。しかし、この主張の実質的な内容を考えてみると、そうした印象はガラッと変わってしまう。非西洋諸国から見てみると、『成長の限界』は「西洋中心主義」の永久化を図っているように見えるのだ。『成長の限界』が、「ローマ・クラブ」の既定の方針に従った報告であったことに注意しよう。「地球の危機」というのはポーズに過ぎず、本当は「西洋社会の危機」ではないだろうか。発展途上国が『成長の限界』の立場を、「環境帝国主義」と呼ぶのはあながち間違いではない。それはなぜだろうか。

『成長の限界』の基本的な主張（ローマ・クラブ方針）は、今までの成長路線を変更して、「均衡状態の社会」へ向かうことだ。一般に、「ゼロ成長主義」と呼ばれている。人口と経済の「ゼロ成長」を目指すこと、これが新たな路線だ。しかし、それは裏から言えば、「現在の秩序の永遠化」に他ならない。つまり、ゲームで一人勝ちした人がシコタマ勝ったあと、「もうゲームするのは止めよう」と言うに等しい。

まず、非西洋諸国であるが、経済発展によって西洋諸国に追いつき、追い越そうとする国々（たとえば日本など）がある。これに対して、「ゼロ成長主義」は経済成長をストップさせ、その発展を阻害することが可能になる。「地球の危機」という大義名分のもとで、西洋による世界支配の永続化が保証される。

次に、多くの発展途上国は人口の爆発的な増大のために、「ゼロ成長主義」によって激しく非難されている。まして、この国の人々が経済成長と生活水準の上昇を要求したら、どうなるだろうか。経済と生活のレベルが西洋と同じ水準まで上昇することは、果たして許されるのだろうか。産児制限さえ強制されかねないのに、こうした経済成長は絶対に不可能だ。求められているのは、現在の経済と生活水準で、人口を削減していくことだけだろう。そもそも、西洋諸国に比較して、人口が異常に多くなることだけでも脅威に違いない。

成長路線を転換して「ゼロ成長主義」をとることは、人口であれ、経済であれ新興勢力の台頭を抑えつける役目がある。

> 「人口をこれ以上増やすな！」
> 「経済をこれ以上成長させるな！」

こうして、「ゼロ成長主義」によって、経済がすでに成長しきった西洋社会の安定化が生まれるというわけだ。『成長の限界』は地球防衛軍として発言しているのか、西洋防衛軍として発言しているのか、よくよく考える必要がある。地球全体主義を唱えていながら、西洋中心主義をこっそり商っているかもしれない。

★未来予測と環境倫理学

『沈黙の春』と『成長の限界』は、環境問題に対してもっとも大きな問題を投げかけた本だ。『沈黙の春』は環

境汚染のおそろしさを生々しく報告し、「沈黙の春」の世界がもうそこにまで来ていることを訴えた。人類にはもう未来はないかもしれない、という予感を感じさせた。また、『成長の限界』は科学的な手法を使って、未来社会のシミュレーションを描き出した。人口増加と経済成長がこのまま続けば、地球は近いうちに破滅し、人類は滅亡するかもしれない、という悲劇的な終末論を明確に提示した。こうした未来予測に対して、環境倫理学はいかなる対応をするのだろうか。

このシナリオをマジに受け取るならば、次のような「環境ファシズム」が主張されるかもしれない。

> 社会の個人主義的な見方、侵すことのできない権利という概念、純粋に自己の思うままに幸福を追求すること、最大限の行動の自由を保障する自由主義的、そしてレッセフェール概念そのものは、すべて疑わなければならない。もし冷厳な環境の劣化とその結果起こる文明の絶滅を回避することを望むなら、今述べたような考えはすべて、大きな変更または放棄が必要となる。確かに、われわれが知っているような民主主義は想像してみるに、生き残れないだろう。

この発言は過激に見えるかもしれないが、『成長の限界』でも同じことが言われている。

> 均衡は、子供を無限に生む、あるいは資源を好きなだけ使うというような人間のある種の自由を、汚染、混雑、および破局の危機から世界システムを救うというもう一つの自由と引きかえることを要求するであろう。

「地球全体主義」とも言えるこうした「環境ファシズム」を、私たちは採るべきなのだろうか。「地球の破滅と人類の滅亡」を回避するために、人々の自由を制限し、全体主義的な強制を行なう必要があるのだろうか。ところが、環境倫理学はこうした見通しをはっきりと語らない。環境汚染を嘆いてみたり、人類の滅亡の可能性を言及したりするのに、それを回避する方法を明確化しようとしないのだ。

それとも、「地球の危機や人類の滅亡」という未来予測が誤っているのだろうか。実際、この未来予測の意図、データ処理の方法、論証のない前提など、さまざま問題がある。科学的な予測の形をとっているが、基本的には「ローマ・クラブ」の方針に従って生み出された未来図だ。一つの世界観だと言ってもいい。世界観であるかぎり論証はそれ自体不可能で、その世界観にしたがって都合のよいデータが組み合わされているだけのように見える。そのため、こうした悲観的な世界観など私たちは受け入れる必要がない、と言いたくなる。

環境倫理学がどのような理論を展開するにしても、こうした未来予測に対する態度は明確にしなければならない。この作業を行なわないで、環境汚染を嘆いてみたり、資源の枯渇を心配したりしても、おそらく何も生み出さないだろう。

［岡本裕一朗『異議あり！　生命・環境倫理学』（ナカニシヤ出版、2002年）による。
注は省略した。なお、明らかな誤植は訂正してある。］